

昔話絵本再考

― 赤本「猿蟹合戦」を中心に ―

岡崎女子大学

赤羽根 有里子

要旨

これまで赤本は草双紙の初期の形態として、その中の昔話ものについても赤本の一作品として、作品そのものの描き方や画風、つまりは江戸期としての絵本の書誌や特徴に関する研究が中心となる傾向にあった。本稿では、江戸期の昔話「猿蟹合戦」を整理した上で、赤本「猿蟹合戦」を中心に「昔話の絵本化」という観点で、とらえなおした。それにより、昔話絵本の絵本化とはいかあるべきか、といった現代の昔話絵本研究にとって参考になるべき視点を見出すことができる。

キーワード…昔話絵本、江戸期、赤本、草双紙、猿蟹合戦

I. はじめに

江戸期に出版された昔話系の絵本をここでは江戸期昔話絵本と呼ぶ⁽¹⁾。昔話の（出版形態の）絵本化は、江戸期において盛んに成されるようになり、草双紙の赤本はその初期の形態として知られている。その中で「猿蟹合戦」は、「桃太郎」「花咲爺」「かちかち山」等と並び、現代においても絵本化されている日本の代表的な昔話の一つである。

語りによって享受されていた昔話をどのように工夫し絵本化したのか。このような観点で、本稿では、江戸期の昔話「猿蟹合戦」を整理した上で、筆者がこれまで主に研究対象として取り上げていた江戸期昔話絵本作品の図版の中で、赤本「猿蟹合戦」からいくつか示しながらとらえなおしてみたい。

II. 江戸期の昔話「猿蟹合戦」の内容

ここではその前提となる、江戸期の昔話「猿蟹合戦」とはどのようなものだったのか、赤本から二種、随筆類から一種を取り上げて、その本文から内容を整理しておきたい⁽²⁾。なお、ここで取り上げる赤本『さるかに合戦』（西村重長画 刊記なし 公益財団法人東洋文庫〈岩崎文庫〉所蔵）と赤本『猿蟹合戦』（画作者・刊記なし 大東急記念文庫所蔵）は、既に書誌・翻刻・注釈研究が成されており、本稿において詞書の記述等を行うにあたり参考にさせていただいた。

1. 赤本『さるかに合戦』

赤本『さるかに合戦』は、現存する江戸期昔話絵本の「猿蟹合戦」の中で、筆者が確認できた中で最も古い作品であり、その筋展開は以下の通りである。

- ① 猿と蟹が、柿の種と焼飯（やきめし）を交換する。
- ② 蟹が植えた柿の種が急速に生長し、たくさんの実をつける。
- ③ 猿は蟹が育てた柿の実を取り、蟹には渋柿を投げ付け、負傷させる。
- ④ 蟹に同情する仲間（白、杵、玉子、荒布等）が集まり、敵討ちの相談をする。
- ⑤ 蟹は仲間の助力を得て仇を討つ（猿の生死は不明）。

この作品の筋展開は、蟹に同情する仲間として、栗ではなく、玉子、糞ではなく荒布（海草）など、現代の絵本等の「猿蟹合戦」で見られるものと、

登場人物等で多少違いが多少あるものの、筋展開は、ほぼ共通するものである。

2. 赤本『猿蟹合戦』

一方、絵柄や筋展開の複雑さからすると、先の赤本『さるかに合戦』より少し後の作品と思われるが、江戸期には赤本『猿蟹合戦』という作品もある。その筋展開は以下の通りである。

- ①竜宮帰りの大猿が漆にかぶれ、医師よりその痛みには蟹味噌が効くと聞く。
- ②大猿の息子は蟹味噌を得るため蟹に近づき、渋柿を投げつけ傷つけ、蟹味噌を得る。
- ③蟹は傷がもとで死ぬ。蟹の息子は同情して集まった仲間（臼、包丁、くらげ）とともに敵討ちの相談をする。
- ④蟹の息子はくらげを力として戦うが大猿に破れ、西国の武文蟹に助力を頼む。
- ⑤蟹の息子は、仲間の助力や武文蟹の軍法で、猿を降参させ仇を討つ。

この筋展開には、「猿蟹合戦」の昔話として一般的によく知られる「柿と焼飯（握り飯やおむすびなどの表記になっている場合もある）の交換の場面がない。しかし、この作品が、特殊な「猿蟹合戦」であるかについては、少なくとも江戸期においてはある程度ポピュラーであった可能性がある。

その理由としては、文化七（一八一〇）年の序文があり文化十一（一八一一年）年に刊行された随筆『燕石雑志』の中で、「宝暦明和の間に再刻するところの絵草紙」として、この赤本『猿蟹合戦』の八丁裏・九丁表の図版はそのまま掲載されていることがある。この記述が確かであるとすれば、この赤本『猿蟹合戦』は、版木が摩滅して再刻するほど、繰り返し出版され続けたことになる。

ただし、1で取り上げた赤本『さるかに合戦』も、この「猿蟹合戦」と同様に出版年が記されていない。したがって原本の成立時期を特定できないのであるが、赤本は画風や画作者の活躍時期から享保期（一七二六～一七三六）とされていることから、その期間を推定するならば、（享保期頃に原本が作

られたとして）宝暦・明和期（一七五一～一七七二）頃、つまり五十年近く刷り続け、さらに再刻して刷り、文化七（一八一〇）年当時も再刻版が存在していることになる。仮に原本が享保期の始めではなく、終わり頃に出版されていたとしても、同じ絵本が八十年近く出版され続けたことになり、現代の感覚でいえば超ロングセラーで、昔話「猿蟹合戦」の内容を示す定番のものとして広まっていた可能性が十分ある。

3. 随筆『燕石雑志』に記録されている「猿蟹合戦」

江戸期において、昔話「猿蟹合戦」の内容は江戸期の随筆にも記されている。例えば、随筆『燕石雑志』はその一つだが、その「猿蟹合戦」の項に記載されている筋展開をまとめると以下の通りである。

- ①猿と蟹が、柿の種と火飯（やきめし）を交換する。
- ②蟹が植えた柿の種が急速に生長し、たくさんの実をつける。
- ③猿は蟹が育てた柿の実を取り、蟹には渋柿を投げ付け傷つける（蟹は死ぬ）。
- ④蟹の親族妻子らは怒り、軍兵を起こして戦うが、猿も眷属を得て抵抗する。
- ⑤蟹に同情する仲間（臼、杵、玉子、荒布等）が集まり、軍略を練る。
- ⑥蟹は仲間の助力を得て仇を討つ（猿は死ぬ）。

これは、発端で猿と蟹との交換の場面がある点で、1の赤本『さるかに合戦』と同じであるが、傷つけられた蟹が死に、その子ども（この場合は子どもだけでなく親族・妻子も含む）が仇を討とうとする点では2で取り上げた赤本『猿蟹合戦』に近い。さらに、臼たちが活躍する前に猿と蟹が集団で戦う場面があることも2の赤本『猿蟹合戦』に近い。

この「猿蟹合戦」の項の冒頭には「昔より童蒙（わらはべ）のすなる物語……」という記述があり、それと合わせて考えると、この内容は『燕石雑志』の筆者自身の記憶というより、当時の子どもたちが語り合っている昔話の内容を書き留めた（そのような姿勢で記した）ものということになる。

以上のことから、江戸期の昔話「猿蟹合戦」として、猿が投げつけた柿に

よって蟹が傷つき、同情した蟹の仲間たちの助力を得て敵討ちを果たすと
いった内容が大筋としてあり、敵討ちは傷ついた蟹が行う場合とその子供が
行う場合があること、また猿と蟹の交換の場面についてはそれが無いパター
ンも当時の人々に享受されていた可能性があったこと等が確認できた。

Ⅲ. 江戸期の赤本における昔話「猿蟹合戦」の絵本化

では、Ⅱで述べたような江戸期の昔話「猿蟹合戦」の内容は、実際のよ
うに絵本化されていたのだろうか。ここでは、先のⅡの1と2で述べた赤本
の二作品について、表紙及び発端の場面を取り上げ分析・考察してみたい。

1. 表紙について

当然のことだが、語りの場合には存在しないものに表紙がある。実は「猿
蟹合戦」の原の表紙は現存していないが、他の昔話絵本では赤本以前の「赤
小本」と呼ばれる体裁で、現代の「かちかち山」にあたる『むぢなの敵討』
という小本には原の表紙がある。その表紙には図1に示すような文字だけを
記した題簽が添付されている。その題簽には中央に大きく「むぢなの敵討」
とあり、その上に小さく「本年／四つ切」という角書、そして左にやや小さ
く「うさぎのちりく」とある。これはこの絵本の内容を示す情報としては適
切なのかもしれないが、読者としてこの絵本を見開く上での目印にはなるも
の、文字方法だけ記した題簽のみの表紙は、インパクト性に欠ける。

その点、赤本『さるかに合戦』の場合は、図2に示すように「さるかに合
戦」という文字の下に、柿の木に登る猿と、その下で手を伸ばす蟹の姿が、
互いに視線を合わせる構図で描かれている。左手に柿を持つ猿は、羽織を
纏ってはいるが体は動物(猿)の姿であるのに対し、蟹は人間の姿をして蟹
を頭に付けている。これによって読者は、この後このような人物と場面が展
開する場面を想像しながら頁をめくったであろう。読者にとって、このよう
な絵題箋が付された表紙は、文字だけの表紙より魅力を感じたにちがいない。

図1 赤小本『むぢなの敵討』(国立国会図書館所蔵) 表紙

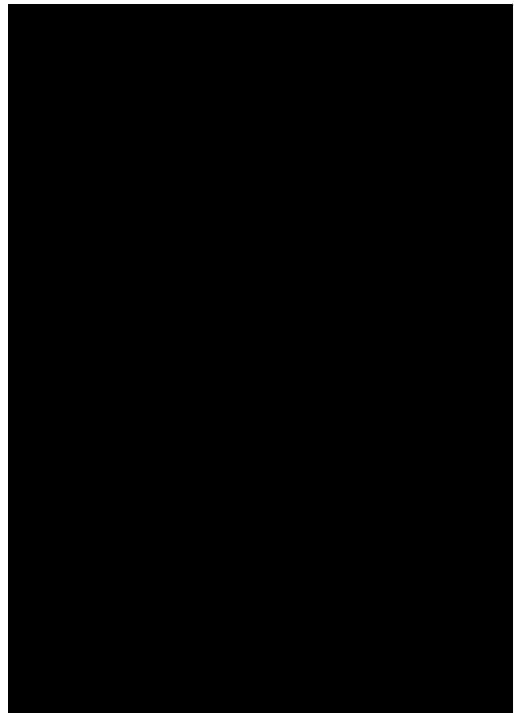


図2 赤本『さるかに合戦』(公益財団法人東洋文庫〈岩崎文庫〉所蔵) 表紙



また、ここに取られている場面の選び方もよく計算されている。もし表紙にこの昔話のクライマックスである「猿が退治される場面」を描いてしまうと、読者にとって、結末を予想する楽しみがうばわれてしまったであろう。また、描かれる人物も主要な人物二者とそれにつわる柿を効果的に配している。さらに作者名「西村重長^⑧」と記すことで、それまであまり表紙に作者名を記すことがなかった絵本について、一つのスタイルを提案するものにもなっている。

赤本以後の草双紙の中には、全面絵柄にする傾向も見られたが、当時の人氣役者を配するなど、表紙は「猿蟹合戦」の内容と離れる傾向も見られ始め、絵本の表紙がより目立ち人々の目に留まることを意識し出した結果とも考えられる。そういう意味では、この赤本(図2)の表紙は、昔話絵本の内容に関連させ読者の興味関心をひきだそうとする意図がある点で、特筆すべきものである。

なお、読者の中には、この絵柄の擬人化の表現に関心をもつ者もいるだろう。例えば、猿は顔や姿形は動物の猿のように描かれているが、袖の短い羽織を纏い、その絵柄に桃の模様がある。桃の模様から、猿は「桃太郎」の猿を読者に想起させる。

この絵本を開く読者にとっては、「これは桃太郎と同じ猿なのか?」「桃太郎の猿の後日譚なのか?」等と想像を膨らませて読んだかもしれない。またその下に描かれる蟹は人間の若者であり蟹を頭に付けている蟹そのものではない(これについては次の項で述べる)。

このように、表紙の一部、題簽のことではあるが、読者の目には、本を開く楽しさや想像力を膨らませる工夫のあるものは魅力的に映ったであろう。表紙をめくると、いよいよ昔話の始まりである。語りであれば、「さあ、そろそろ昔話を語ろうか」といった準備が整い、語り手も聞き手も、これから始まる昔話の世界をそれぞれ想像し、昔話を語る(聞く)モードに切り替わる。昔話絵本の表紙はそのような役割も担っていたのではないのか。

なお、赤本『猿蟹合戦』は原題簽が外れており後の題簽「猿蟹合戦 赤本」が付されているのみのため、ここでは言及しない。

2. 絵本化の実際

ここでは、作品の発端部分を例に、どのように絵本化されているのか、(1)赤本『さるかに合戦』の場合、(2)赤本『猿蟹合戦』の場合として分けて述べる。

(1) 赤本『さるかに合戦』の場合

①本文と絵の配置

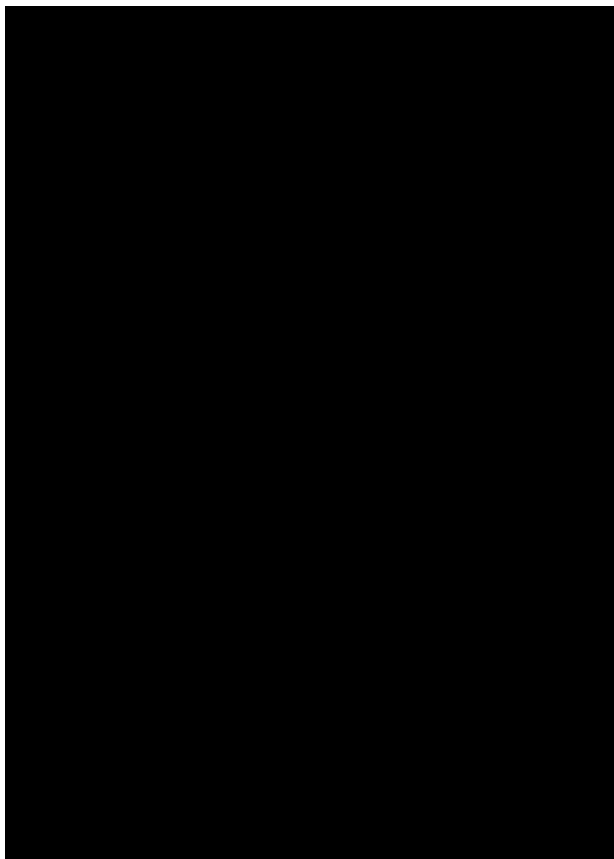
赤本『さるかに合戦』の発端には、図3に示すように、猿と蟹が出会う場面が描かれている(二丁表)。表紙の絵題簽とは逆に、右側に猿、左手前に蟹が描かれ、猿は桃の実と葉をあしらった羽織付きの着物を身につけ、右手に柿の種(さね)を持つ。蟹は渦巻き模様をあしらった羽織を纏い、右手に「やきめし(焼飯・火飯) 手にしている。

読者は、表紙をめくると、まず、本文「むかしむかしあつとき。山のさるとさわべのかにと、山をまわりあそびける」(表記は原本に従い、句読点は筆者が適宜付す。ただし踊り字の「く」は書き下して表記した。以下同じ)が目に入り、この場面の流れを把握することができる。と、同時にこの本文の下に描かれる、この昔話の主要人物である猿と蟹の姿を確認したのである。次に猿の膝元に「さるはかきのさねをひろい、かにはやきめしをひろい、かにとりかへける」とあり、先の本文との時間の隔たりを、そしてこの二人が何をしているのかを理解する。猿の右手には先のとがった柿の種らしきもの、蟹の右手には三角のお握りのようなものが描かれている。

和書は右頁から左頁へと読み進めていくので、次に読者は視線を右上から左下に移すだろう。それに合わせるように、猿は右上に蟹は左下に、猿と柿の描き方は視線が合うように、また猿の右手と蟹の右手の距離は、その後の交換へとつながる、ほど良い間隔で描かれている。

つまり、読者が、猿と蟹との交換の様子を容易に理解できるような、本文と絵の配置、構図が工夫されているのである。語りであれば、語り手の聞き手の反応を見ながら話を進めていく間のようなものが、本文や絵の配置にも表れていた可能性がある。

図3 赤本『さるかに合戦』（公益財団法人東洋文庫《岩崎文庫》所蔵）
一丁表



②登場人物の擬人化

登場人物の擬人化は、絵本化することに生じた課題であり、作者はどのようにに絵柄として表現したよいか頭を悩ませたであろう。語りであれば、「猿と蟹が柿の種と焼き飯を交換した」と言葉で表すだけでよかつたのである。したがって、この場面の絵本化として、注目したいのは猿と蟹の擬人化の方法である。猿は大きさも体の構造も人間に近く擬人化しやすいが、問題は蟹の擬人化である。「猿蟹合戦」の猿と蟹は、昔話の中では対等の関係で、台詞も同等に交わす。語りであれば問題は生じないが、もしこの場面を絵でそのまま描くと、蟹は猿よりかなり小さく描かねばならず、絵として迫力に欠けてしまう。そこで赤本では蟹を猿と同じような人間の若者の姿で描き、蟹は頭に載せるように描かれている。

また、猿の左袖には(猿)、(蟹)の背には蟹と、読者が登場人物をすぐ識別できるように配慮がなされている。これはこの作品だけではなく多くの草双紙

作品に見られる描き方の工夫であるが、赤本はその初期のものとして、また読み聞かせを行う場合に指し示す目印として、さらには文字を習い始めた子どもにとっても、登場人物の把握や文字への関心につながるものとして注目したい。

③描かれる場面の背景

この場面の背景には山の稜線や松の木が描かれているが、これは単なるこの瞬間の背景としての絵柄なのだろうか。本文には、猿と蟹が柿の種と焼き飯を交換する前のこととして、「山のさるとさわべのかにが山をまわりあそびける」と記されている。絵本化するということは、ある場面を切り取り時間の流れを止めてしまう。

語りであれば、時間の流れはそのまま言葉で表現すればよいが、絵で時間の流れを表現するのは難しい。特に一枚の絵で表現するのは不可能に近い。猿と蟹が山を回って遊んでいる様子を同じ場面に描く方法としては異時同図法があるが、ここではそれを使わず、「山をまわりあそびける」と記された本文のすぐ下に、松の木や山の稜線が描くことで、読者は猿と蟹の交換の前にどのような光景があったのかを想像できるようにしたのではないか。

この「山のさるとさわべのかにが山をまわりあそびける」という本文を読む限り、この時点でこの二人に敵対関係はなく、むしろ一緒に遊び回るほど、近い友達のような関係であったことが推察される。それは、猿と蟹のそばに付された、それぞれの次のような会話のやりとりからもうかがえる。

(猿)「うまそうなやきめしの。このかきのさねととりかへてください。しかもこれはこしよよかきのたね、これをうへてかきかできたら、おれにくれさつしやい」

(蟹)「やすいこと、かへてしんじよう」

猿は蟹に自分の気持ちを素直に表現し、蟹はそれに対して「易いこと」と気軽に承諾をしている。なお、「こしよかき」とは「御所柿」を指すとされ、当時の読者には極上の柿であると知られていたので、この「しかも」以下の台詞は蟹にとっても利益になると受け止められたに違いない。

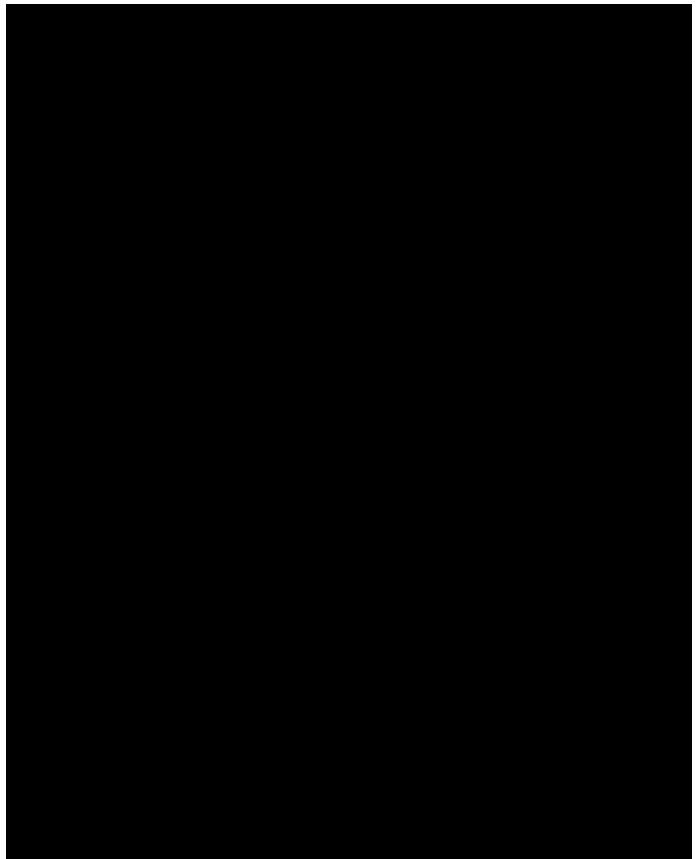
(2) 赤本『猿蟹合戦』の場合

①本文と絵の配置

赤本『猿蟹合戦』の発端は、図4に示すように、三匹の猿が描かれているが、読者はこの絵柄を見ても、どのような場面かはずぐには理解できないであろう。本文は先の赤本『さるかに合戦』と同じく右上から始まる。ただし、右上といっても文字の上に桃の模様のある戸袋の絵があり、赤本『さるかに合戦』と比べるとやや読みにくい。その本文には「子供の昔話には「子供が語っている」昔話であることを断った上で、「大ざるりうくうよりかへりに、水中にてうるしにかぶれ、けくわをたのみけ(る)」とある。つまり、大猿が竜宮より帰る途中で漆にかぶれ、外科(医師)を頼んだ」という内容がわかる。したがって、本文の内容から、右が漆にかぶれた大猿、左は恐らくその女房、手前は医師である。

大猿と医師は向き合い、会話を交わしているようだが、大猿の言葉は記されていない。手前に医師(背に庵[㊦])という印)の言葉は、医師の左右に記されている。そこには「此いたみは、かうやくもよけれとも、かにのみそにしくはなしとでんじゆする…」とあり、この言葉から、大猿は痛みで苦しんでいること、この痛みには膏薬を貼っているがそれより蟹味噌がよいことを伝授していることがわかる。つまり、この場面には蟹は登場しないが、次の場面に蟹との出会いがあること、猿は蟹味噌を得ようとする(蟹を傷つける)場面があることを予想させる。

本文と絵のバランスという観点では、先の赤本『さるかに合戦』より余白が少なく、絵と文字を両方合わせて楽しむように読者には読みにくい。最初の読み始めとなる文章はかろうじて右上にあるものの、読者の視線や登場人物の位置を計算して文字を配したというより、絵の隙間に文字を入れ込んだという印象が強い。これは絵本といえども、読み物のように文章を増加させていく、赤本以降の草双紙の傾向と重なる。昔話絵本が次第に、絵を読み解くより、絵を見ながら文章を楽しむものに変わっていく、そのような作品を楽しむ読者が増えていくことを示唆する例ともいえる。



②登場人物の擬人化

この場面に描かれているのはいずれも猿であり、擬人化という点では、基本的に衣服を着せるだけでよく、蟹に比べれば描きやすい。ただ、全て猿という点では描き分けが必要である。ここでは漆にかぶれて痛みを苦しむ大猿を右奥に大きく描き、右袖に(大)の印を付け、着物をゆるく着せることで、痛みを取るために貼ったであろう黒い湿布薬(膏薬)が見えるようにしている⁽¹⁰⁾。大猿の横には、太帯を手前に結ぶ小柄な猿がおり、大猿のそばに寄り添うように描かれていることから大猿の女房と見られる。手前の猿は背に庵^(㊦)の印を付け、葉箱がそばに置くことで、大猿の見立てをする医師であるように描かれている。

このように同じ猿でも、大きさや衣装や小物により描き分けられている。また、大猿の場合に付けられる印が猿ではなく大になっていることについては、次

の丁(図5)で息子の蟹平が登場し、それと区別するためである(息子の猿の左袖には蟹平の(平)が付けられている)。

なお、図5には猿に傷つけられる蟹が描かれているが、この蟹は赤本『さるかに合戦』の蟹のような人間の姿ではなく、蟹の姿で描かれている。「蟹味噌を取る」ことを描くために蟹の姿で描いたのか。ただし、左上の蟹の息子(蟹八)は、赤本『さるかに合戦』と同様、頭に蟹を付けた人間の姿で描かれている。ここに蟹の息子を登場させることで、今後猿と蟹が争う場面に展開することを予想させる。

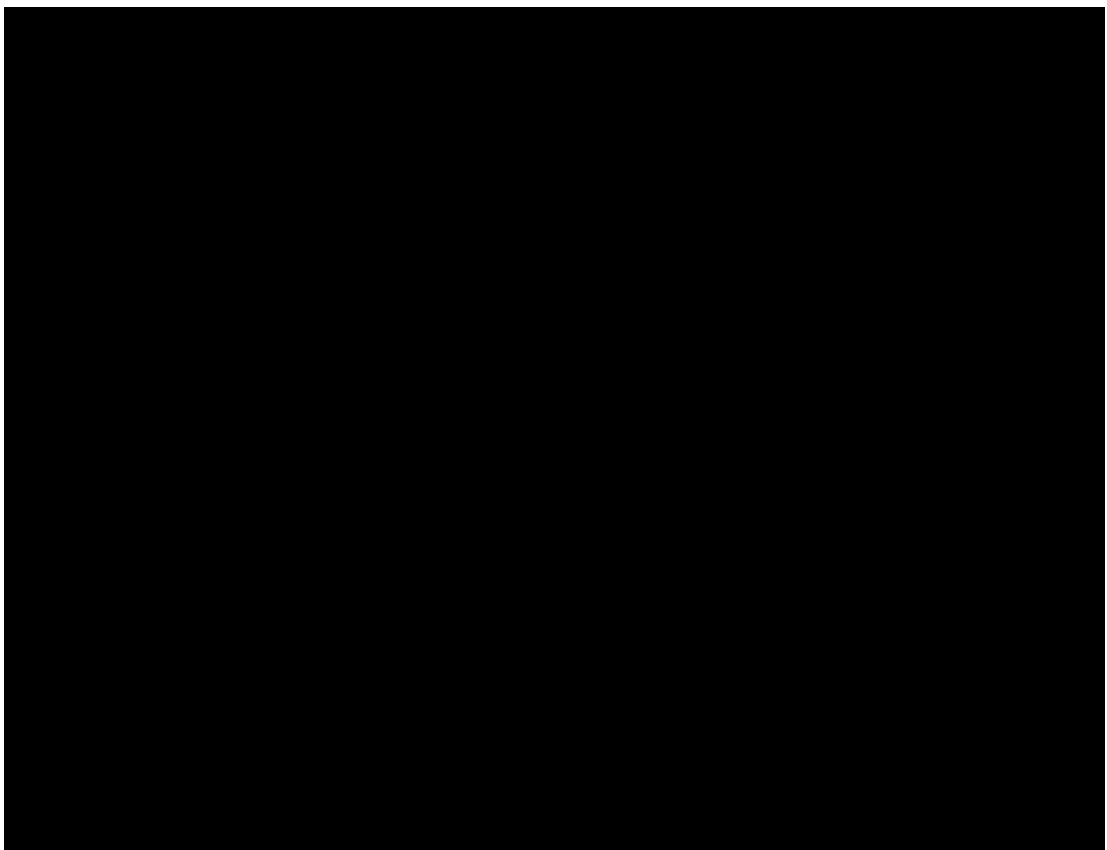
③描かれる場面の背景

図4に描かれる場面は三匹の猿が描かれ、その背景、大猿の頭上に桃の絵柄が見える。それは猿の家の戸袋にあり、読者ならまず目に入るものである。なぜこの位置に桃を目立つように描いたのか。赤本『さるかに合戦』の場合も、猿は桃の模様を付けた着物を纏っていた。それよりはるかに明確である。読者にとって、猿と桃といえば、やはり「桃太郎」に登場する猿を思い浮かべるであろう。「桃太郎」と「猿蟹合戦」は別の昔話であるが、ここに桃を描くことによって、「桃太郎」を知っている読者はそれを想起し、まだその昔話を知らない読者にとっては何を意味するのか関心をもったり、子どもであれば身近な大人に尋ねたりするかもしれない。

また、桃の絵柄の下にある本文を読むことで、この猿は竜宮から帰ってきた、つまり「猿の生き肝」(現代の「くらげのおつかい」)の昔話に登場した猿であることがわかり、ここでまた読者は過去の昔話体験を想起したり、まだそれを知らない読者にとっては他の昔話に関心を持つきっかけになったりした可能性がある。

実は「猿の生き肝」に関しては、赤本として『猿のいきぎも』という作品があり、その表紙の題簽に描かれる猿も桃の枝を手をしているのである。当時の読者にとって、猿は三つの昔話に共通するものとして読む

図5 赤本『猿蟹合戦』(大東急記念文庫所蔵) 一丁裏・二丁表



楽しみ方があったのかもしれない。そのように読むと、この猿はかつて桃太郎で鬼と戦い、さらに「猿の生き肝」でも知恵を使って生き延びた猿として、

経験豊かな大猿として描かれていた可能性もある。

このように、この場面に至るまでの背景として「竜宮より帰る」ことを本文に入れたり、絵柄の中に「桃」を描いたりすることで、読者の想像力を膨らみ、この作品の楽しみ方もいっそう広がったに違いない。語りであれば、聞き手が昔話を聞いて思い描いたことを想像したり、語り手がその昔話から着想した解釈を付け加えたり、そのようなやりとりが表現されていた可能性もある。

IV. まとめと今後の課題

赤本は江戸期昔話絵本の初期にあらわれる出版形態であり、その中でも今回取り上げた作品の一つ『さるかに合戦』は表紙から最終丁まで欠けることなく現存する貴重な作品である。この頃は踏襲すべき作品などはほとんどなく、昔話の絵本化については、まさに作者自身の創意工夫が発揮されたであろう。また、もう一つの『猿蟹合戦』については、先の作品より、本文と絵のバランスを取るといったことはあまり重きが置かれず、本文・絵柄とも情報量を増やして読者を楽しませようとすることに重点を置いた可能性がある。

これまで赤本は草双紙の初期の形態として、その中の昔話ものも赤本の一作品として、作品そのものの描き方や画風、つまりは江戸期としての絵本の書誌や特徴に関する研究が中心となる傾向にあった。しかし「昔話の絵本化」という観点でとらえなおすことで、昔話絵本の絵本化とはいかあるべきか、といった現代の昔話絵本研究にとって参考になるべき視点を見出すことができる。

例えば赤本『さるかに合戦』でいえば、最初に読者に読んでほしい地の文は右上に、登場人物の台詞はそのすぐそばに余白をとって配置し、それぞれの登場人物がリアルに言葉を発しているように描いたり、背景もそれまでの時間の流れをつなぐように背景を配していたりする等、読者の視線の流れ、語りであれば、聞き手の理解に沿って話したり、語り手の間のようなものを意識して楽しめるような工夫があった。

赤本『猿蟹合戦』では、猿を登場させる場合も、猿が登場する他の昔話を

想像させるような本文や絵柄の工夫が見られた。例えば猿は「猿の生き肝」(現代では「くらげのおつかい」として知られる)から帰ってきたという設定であったり、発端の絵柄の背景(猿の家の戸袋)に桃の絵を描き、その絵を読者が目に入りやすい場所に配置したりする等、読者のそれまでの昔話体験や想像力を膨らませる工夫が見られる。

このような工夫の中で、例えば文字と絵の配置については、現代の昔話絵本にも受け継がれている部分もあるが、読者の昔話体験を想起させたり、想像力を膨らませようとしたりするのはあまり見受けられない。赤本は昔話を絵本化するという点で、踏襲するような作品もまだ少なく、作者が真剣に「昔話をどのように絵本化したらいいか」を考え、試行錯誤の結果いろいろな表現方法を生み出していったにちがいない。それは現代の昔話絵本の表現や構成の在り方についても示唆を与えるものであると考える。今後分析の対象を広げて検討したい。

付記

本稿を成すにあたり、公益財団法人東洋文庫、大東急記念文庫より図版掲載の許可をいただきました。また国立国会図書館所蔵の図版は、国立国会図書館ウェブサイトで転載させていただきました。ここに記して深謝いたします。

注

(1) 江戸期昔話絵本の定義について、詳細は、拙著(一九九九)『江戸期昔話絵本の研究と資料』(三弥井書店)序章第一節の1『江戸期昔話絵本』とは「一〜二頁を参照のこと。」

(2) その他「猿蟹合戦」一覧については、前掲の拙著『江戸期昔話絵本の研究と資料』(一九九九)第五章「猿蟹合戦」一六六〜一六九頁を参照のこと。

(3) 本稿で取り上げる赤本「猿蟹合戦」について、鈴木重三・木村八重子編『近世子どもの絵本集』江戸篇(一九八五)岩波書店所収の「さるかに合戦」(三〇〜三五頁)及び「猿蟹合戦」(四六〜五六頁)に、解題・影印・翻刻・注・解説がある。ただし、「猿蟹合戦」の書名の

- 記載については、題簽が後のもので「猿蟹合戦 赤本」とあり、元の書名は不明である。本稿でこの「猿蟹合戦」の書名を表記する際は、後の題簽の表記を用い『猿蟹合戦』とした。
- (4) 現存する江戸期昔話絵本「猿蟹合戦」ものの詳細については、前掲の拙著『江戸期昔話絵本の研究と資料』第五章「猿蟹合戦」一六六頁参照のこと。
- (5) 曲亭（滝沢）馬琴著『燕石雑志』は、文化十一（一八一二）年に刊行された五巻六冊の随筆で、その巻の四に「猿蟹合戦」についての言及がある。なお、活字版は『日本随筆大成』第二期十九巻（一九七五年 吉川弘文館）等に収められている。「猿蟹合戦」の本文をもとに筋展開をまとめるにあたっては、この活字版『日本随筆大成』第二期十九巻「三四〇四三五頁をもとにした」。
- (6) 注5に同じ。
- (7) 傷ついた蟹について、注5に揚げた『燕石雑志』「猿蟹合戦」の本文にある「その疼痛堪がたくて、遂に得起きず」という記述により、蟹は命を落としたと判断した。
- (8) 西村重長（にしむらしげなが）、享保期〜宝暦前期を中心に活躍した浮世絵師。宝暦六（一七五六）年没。
- (9) 御所柿については、江戸後期の辞書『和訓栞』中編（谷川士清編）「かさ」の項に「御所柿を第一とす、大和葛上郡御所村より出す」等の記述があり、現在の奈良県御所地区原産の柿で、江戸時代には極上の柿として幕府や御所にも献上されていたといわれている。猿が持つという柿の種が本当に御所柿のものかは不明であるが、それほど美味しい柿になることを伝え、何とかして蟹の焼飯と交換したかったのである。当時の読者であれば、「御所柿」という名前を出すことで、その柿の美味しさを想像できたに違いない。
- (10) 前掲『近世子どもの絵本集』江戸篇所収の「猿蟹合戦」の五六頁記載の注釈に「猿は応急処置として体に黒い膏薬をいくつも貼っている」とある。
- (11) 前掲『近世子どもの絵本集』江戸篇所収の「猿蟹合戦」の五六頁記載

の注釈に「医師は何庵と号する者が多かったので、背に「庵」とある」という解説がある。

- (12) 赤本『猿のいきぎも』（画作者名・刊記なし 公益財団法人東洋文庫〈岩崎文庫〉所蔵）の表紙による。

引用文献

- 1) 日本随筆大成編輯部編（一九九五）『日本随筆大成』第二期十九巻「燕石雑志」吉川弘文館、四三四頁。